

第3回農林系アカデミー・農業大学校運営向上検討会議事要旨【確定稿】

日 時 平成30年12月18日（火）13:00～14:40

場 所 議会西棟3階第一会議室

1 河合副知事あいさつ

- ・冒頭、畜産研究所、農業大学校で豚コレラが発生し、我々として最も注意を払っていた場所で起きたということで、お詫び申し上げます。
- ・今回運営向上プラン（案）という形で提案させていただいており、園芸アカデミーの将来的な移転などの時間がかかるテーマや、明日からすぐにでも取り掛かれるテーマなどもあるので、本日皆様のご意見をいただき、やれることからすぐに取り組んでいきたいと思うので、忌憚のないご意見をお願いしたい。

○座長

- ・前回の議論を踏まえて、「県立農林系アカデミー・農業大学校運営向上プラン（案）」を事務局に作っていただきましたので、これについて事務局に説明いただき、説明に基づいて委員の方にはご意見いただきたい。

2 取組み紹介

- ・「県立農林系アカデミー・農業大学校運営向上プラン（案）」について及び連携する部分の取組み案について熊崎農政部長から説明し、それぞれの学校の取組み案について、森林文化アカデミー、国際園芸アカデミー、農業大学校の順で各学校から説明。

3 意見交換

○座長

- ・私自身、森林文化アカデミー以外の2校をあまり知らなかったもので、先日農業大学校と国際園芸アカデミーを見学させていただいた。印象として、非常に整備された環境であると感じた。しかも豚コレラ対策で、入口からずっと石灰が散布されており、極めて厳重な対策がされているという印象を受けた。農業大学校で豚コレラが発生したことは、非常に残念であり、皆様のご苦勞も計り知れない。
- ・非常に場所も良いところだし、あれだけの広大なキャンパスがあれば、学生も良い学習ができるのではないかと思う。

○K委員

- ・なかなか一般に開放されていない施設だったので、皆様の目に触れて意識を持ってもらえたことは良かった。
- ・6ページの「農山村への移住、起業等に関する研修の実施」について、2年間かけて計画して、3年目から実施するというのは、いかにも役所的で取り組みが遅い。もう少し早く実施できないのか。

- ・14ページの国際園芸アカデミーにおける「可児市の花いっぱい運動への参加や花フェスタ記念公園との連携」について、ご存知のとおり以前岐阜県は、花の都運動などをやる時、財団があり、都市建築部に属していたのだが、ニーズの掘り起こしなどを運動として盛り上げてきた時代があった。今、県として力を入れ損なっていることとすると、ニーズの掘り起こしの部分。どこがやるかは別ではあるが、県として、あるいは国際園芸アカデミーとして、花をもっと使ってもらおうとか、表彰するときに使ってもらおうとか、運動の一翼を担っていただくとともに良いのかと思う。

○座長

- ・少し国の状況をご説明しますと、国土交通省と農林水産省と環境省とで、来年度どのような社会資本の在り方を考えていくべきかを議論しており、社会システムとしてのグリーンインフラというものを社会資本循環整備計画の中に取り入れていこうとしている。グリーンインフラというものは、超少子高齢化社会の中で、我が国が他の国々々々どのように対応していくべきかを考えていくとき、従来型のハードだけの公共整備で望ましい国づくりができるのかということが話し合われている。今後何が一番大事かということ、日本が持っている自然資本材（農林水産及び公園緑地等）を機動的に対応させながら、グレーインフラとグリーンインフラを相互にシナジーさせて考えていくことが非常に重要である。

たとえば、気候変動において、集中豪雨などが起こった時、従来は、これを下水道管でどのように排水していくかということしか議論していなかった。しかし、今後は農林水産空間の中で一旦引き受けて、大都市なら公園緑地で一旦引き受けて、ピークカットをしてグレーインフラの方へ受け継いでいく考え方を持っていないと、財政支出が追いつかない。そもそも日本な自然というものを巧みに利用しながら災害を緩和するという方法を考えてきたわけですし、そういう伝統が結果として、多くの外国人が、日本のことを「自然と共生する姿を持っている美しい国」と評価し、インバウンドにも繋がっている。単に農林水産空間とか公園緑地とか狭い考え方ではなく、社会システムとして自然資本をどのように活用しながら地域創生を図っていくのかということについて、しっかりとした取り組みをやらうと急遽この12月に第1回の委員会が開かれて、本年度中に一つの哲学を固め、そして来年度具体的な事業を実施するという方向に今動いている。

やはり、地方が今後生き残っていくためには何が必要なのかということ、生産額や出荷額といった額の部分だけで農林水産業を捉えて良いのかということ決してそうではなく、非常に多目的な公益性が含まれている。一方で多面的な、一方で生活の質の向上を図りながら、なおかつ社会資本として存在意義を発揮することにより、魅力ある地域を創生していくという方向がすごく大切。そのためには、そこを担う人たちが高齢化しており、そういった空間をしっかり担保していく担い手をどうやって育てていくのかという極めて重要な役割をこの3校は持っている。

そういう意味で、私の意見としては、3校がそれぞれ課題を持っていて、お互いに

シナジー効果をもたらして、効率のよい学校経営をやっというための集まりではなくて、もっと志の高い前文のようなものがあって、これを県民が読んで、「なるほど、そういうことか」と理解してもらうところから始めないと、産業としての農業、林業、花き園芸に埋没していってしまう。県民が共有するということに導かれていけないのではないか。こういう県土像にするためには、3校の人材育成が極めて重要な戦略だという記述があると良い。

○J委員

・意見を聞いてまとめたのだから内容としては問題ないと思うが、それよりも3校の連携を具体的に進めながら、出来るところから始めていかないと進まないと思う。ぜひ、全部じゃなくて良いので、まずは来年3校の連携が目に見えるような状態を作っていただくことが一番良いのかと思う。

・あとは、誰が責任を持ってこれを見守っていくのかということが必要になってくる。今後どうなるかわからないが、我々がこれで橋渡しをしたということになれば、次に誰がこの3校連携を責任持ってやっっていくのかということを決めることができれば、あとはできるところから始めていけば良いと思う。

○座長

・たいへん貴重なご意見ありがとうございました。まさに今後誰がこの推移を見守るのかということを含めて、第三者の評価機関みたいなものがないと、我々だけで中身を考えても非常に具合が悪いので、進捗管理なり、先生方の意見に即した形で目標を定めるなど必要かと思うので、ぜひその点は事務局の方でご検討いただきたい。

○M委員

・まずは、もともとこの学校の存在をあまり知らなかったところもあるので、機会としては非常に良かった。

・連携、共同というところでは、共同でPR動画を作成するとか、3校で見学ツアーを実施するとか、連携することは良いのだが、同じ農林業分野の中で、3校でしっかり特徴を出していかないと、逆の印象を与えてしまう。3校合同でやっってことが、そもそも3つ必要なのかということになってしまいかねない。3校の特徴がそれぞれ出せているのか。

・中身を読んだの推測ですが、森林文化アカデミーは非常に競争力が高いのではないかと感じる。座長の存在、ドイツの学校との提携、自治体との連携などもあり、おそらく県外からの入学生も多いのではないかと思う。違いが出せる・訴求力があるというのは、何をやっているのか、どこをやっているのかということであり、内向きにやっっていると訴求力がない。外とやれば当然メジャーな発信力がつくということになる。

・園芸アカデミーの取り組みを見ると、今まで教員の異動がなかったから異動させますなど、今の中身では少し薄いかと思う。

・連携的部分でいうと、それは本来もっと前からあるべきではなかったのかという印象を受けた。

・農業大校についても、印象としては内向きな気がする。農業高校の卒業生を吸収するという形になっていて、内向きでもやっていける状況を作ってしまったのかと思う。であるならば、農業高校は今農業にたくさんの人を集められているのかという問題があり、そこを考え始めると、もっと高校などにも目を向けて大きな形でやっていく必要があるのではないか。

○座長

・森林文化アカデミーについてお褒めをいただいたが、我々も悩んでいるところがあり、方向は良いが、教育レベルから言うと今抱えている教育で手一杯で、連携をどこで誰がどのようにやっていくのかというところで、マンパワーが足りないという意見が出ている。そういう現実には現実で受け止める必要があり、3校連携をただ成果だけでも求めてやっていくというよりかは、むしろお互いがどこで合理化し、どこでシナジー効果が出せるのか、そのためにはどこに無理がかからないようにしていけば良いのか等をしっかり考えていく必要がある。共同化できる場所もたくさんあるが、今話題の日産とルノーと三菱自動車の件でもそうだが、シナジーを高めていくのか、あるいは一緒の市場にしてしまうのかという議論と同じように、我々が考えていくべきことは、お互いが触発し合って、外に向かって開いた行動をとっていき、シナジー効果を更に上げ、それが結果として県の公益性に資するような方向でなければならないという論点で行かなくてはならないのではないか。

○C委員

・3校とも成り立ち、性格、状況が違うことが出ているのかと思う。3校の連携の横串というところで、座長が最初に言われたコンセプトというところが出ていないと思うのでそこは必要だと思う。

・県政の課題として地域政策とか地域連携とか地域振興とか、地域活性化というものに、この3校は重要な役割を果たす気がする。そこを表にまず出す必要があるのではないかと思う。だから、HPを立ち上げて結局3校バラバラのHPができるだけではないのか。例えばそういう体制はこれから伺えたらとは思いますが、県庁のHPを見たら3校の取り組みが表に出ていて、そこから3校のHPに進むことができるとか、3校どこのHPを見ても他の2校のことを見られるとか、そこは工夫されると思うが、そういう姿勢みたいなものがないのではないかとと思われるのと、3校とも対象として高校生などの学生を見ているが、社会人も対象にして、岐阜県は自然や環境はこうで、学校はこういうところで、就農や林業にも携われるというストーリーが必要なのではないか。

・空き家とか耕作放棄地とかの問題があり、Uターン、Iターン、就農、転職などの希望者に対し、漠然と農業や林業など、何が良いのだとなった時に、この3校はネットワークもあるし、民とのコンソーシアムもあるし、専門的な教育も受けられるという流れがあって、そうなれば3校で連携する意味があると思う。そういう視点が必要なのではないか。

○座長

- ・C委員は、ご存知の通り、兵庫県で淡路園芸景観学校と兵庫県立大学を一緒にしながら、独自の教育をつくり上げることに県の立場で関わってきた方です。
- ・先ほどのグリーンインフラの話について追加すると、環境省が横軸の役割を果たして、国土交通省と農林水産省が縦軸で、地域共生循環圏構想というものが内閣府の方で検討されている。これは何かというと、今までのようにお互い独自の地域振興ということではなく、改めて生産物とお金とエネルギーを地域の中で循環していく仕組みを作っていこうというもの。これは財務省も賛成していて、例えると昔の藩のような経済。そういう形で効率良く地域の中で経済が循環していくという体制をどう作っていけば良いのかというと、例えば国際競争力があって、大量に作れる平場の地域であれば全く問題はないのだが、中山間地域などでは、相当高付加価値をつけていかなくてはならない。そういった高付加価値を生み出すということになると、そういった概念が必要になってくる。そこは我々の学校にとって大きな切り口になるのかと思う。
- ・一方個人的に思うのは、人が足りないということに対し、国内の人材育成だけではなく、海外の労働者も相当入ってくると思う。質問だが、外国人就労の議論もあるのだが、就労形態が専業農家ではなく、雇用就農で入った時に、農家から番頭の立場で外国人労働者をマネジメントする能力も求められてくるのではないかと思うが、そのあたりはどう思うか。

○農業大学校副校長

- ・個人的な意見も含めてだが、うちの学校は自営農業者を育成することが一番の目標としている。ただ、現状を見ていると、株式会社方式などいろいろ出てきて、雇用就農も増え、育成すべき学生の資質は何なのかという議論も出てきた。トマトを作る技術を教えるだけで良いのか。例えば飛騨で3ha 作っている農家に話を聞くと、トマトを作る技術は当然大切ではあるが、それよりも各ほ場のパートさんを管理する能力、的確に指示ができるかという能力が必要と言われるので、そちらの資質をどのように育てていくのかというのが課題。
- ・現状は、農業大学校は全国にネットワークがある中で日本農業経営大学校というものが、大規模農家の息子などは、うちの学校で野菜の作り方を学んだ後、そちらに2年間行って経済を学ぶという流れがある。うちの学校がそのレベルになることは難しいが、そのようなカリキュラムを取り入れていく必要もあるのではという議論はしている。

○D委員

- ・法人格で農業やっている立場では、今言われたように、番頭さんが何よりも大事。技術面では、各個人差があって、癖があってという中で、技術として知識があるのは良いのだが、指示に従ってもらおうということが主となってくるので、そうなるとその指示、管理をどうできるかが大切となってくる。

・もちろんGAPを学んでいればそのあたりは統制できる技術として持って入ってくるのかと思うので、すごく期待している。

・3校の連携という部分で、自分としてワクワクした部分としては、生産技術だけで良いのかという部分で、生産性の向上と所得の向上というところは非常に大切なところで、農業ではもっと魅せる農業というものが大切になってきている。そういう時に、花や造園等の魅せる技術が学べるとなると非常に役に立つのではないかと。自分もSNSで海外の農業などを見ていると、おしゃれにやっているところは一つの魅力になると思うので、生産性と魅力発信の経営としての分岐点なども課題として学んでいけると連携する部分が見えてくるのではないかと。

○A委員

・何のために連携するのか。学校の経営がうまくいってないから連携するのか。やはり生徒が笑顔になる連携をしないといけない。SNSで魅力を発信していけば、興味を持ってもらえて、そこからいろいろなものが生まれてくるのではないかと。魅力の連携、笑顔の連携が大切である。

○I委員

・他の委員の方々は、現場を知らないと言意見が出せないということで見学に行かれたと言われましたが、森林文化アカデミーは何度か行ったことはあるが、農業大学校や国際園芸アカデミーは一度も行ったことがないので、今回行ってから来ればよかったと反省している。やはり現場を見せていただけるともっと密な話し合いができると思う。

・目標について、何年に向けて目標を立てているのか。5年間の計画なのかそこをはっきりしてもらいたい。目標について、「未来を支える人づくり」となっているのに、その下に「担い手不足に」というマイナスの言葉が入っていて、何となく目標にそぐわないのかなと思った。学生に向けてのプラスの目標にしてもらいたい。

・目標を立てて、点検して、改善していく意見を言う場がないと、これで終わりになってしまうので、その委員会の立ち上げ等をどのように考えているのか。

・女性が大変増えているということについて、女性のための学校環境が整っているのかということが気になる。例えば、お手洗いや着替えなどの環境整備がどうなっているのか。女性の受け入れが整っていれば、併せて障害がある方の受け入れ体制も整ってくると思うので、そのあたりの環境整備についてはどのように考えているのか。

・PR動画やHPの作成について、私たち大人の固い頭で考えるとつまらないものになってしまうので、是非学生の立場に立って、子供たちにどうPRができて、どう受け止めてもらえるかを一番大切にさせていただき作成していただけたらと思う。

○農政部長

・目標を立てるときに「未来を支える人づくり」としたときに、なぜ3校の強化なのかということに関して、練り切れてない部分がある。

・目標年については、そもそも目標とは何なのかというものがあって、これは単なる

5年間の事業の計画なので、最初の趣旨についてもう少し整理したいと思う。

- ・先ほどから聞いていて辛い部分があり、大変申し訳ないと思う。
- ・委員会の在り方について、進捗管理の在り方について、これで終わりということではなく、これをどうフォローしていくのか、PDCAの中でどう進めていくのか検討してまいりたいと思う。
- ・PR動画については、最初、新聞を作るという話もあったのだが、それはどうかというところで、若者に見せる動画の作成とした。この作り方については、先ほどの意見を参考にしていきたいと思う。

○座長

- ・先日、農業大学校に行ってみ学させていただいたが、全寮制ということで、非常にうらやましいと環境だと思った。是非次の機会があれば、委員の方にも各学校を見ていただく機会があっても良いのかと思う。
- ・先ほど寺田委員からの意見に関連して、参考ですが、来年4月から北京で「国際園芸博覧会」が開催される。北京と言っても内モンゴルの辺りなのだが、このテーマが非常に曲者で、通常、花博と言えばフラワー&グリーンというのが通常ですが、北京の園芸博覧会では一切その言葉は入らず、「ホーティカルチャー」がテーマとなっている。なぜ国際園芸家協会がこのようなテーマとしているかということ、ここに中国の戦略があって、内モンゴルは非常に生産性が低いところで、気候も冷涼で、11月になると凍結深度が1mくらいになるので、工事ができないくらい劣悪な環境。そこに太陽光パネルを利用した施設園芸群を作っていく、果菜類を中心に生産をして、それを一帯一路で欧州に出荷していく戦略だと考え、私はそのことについて質問したら、一帯一路の計画をよく理解していただきありがとうございますという回答が来てガクッときたが、言わばそういうことだと思う。つまり施設園芸を魅せる形にして中国ブランドを作っていく戦略と思われる。つまり魅せる農業というのも非常に大切だと思う。

○E委員

- ・岐阜県というのは、1990年代に花の都ぎふ推進運動を進められて、それは大阪の花博を受けていて、そこから花の振興ということで昇り調子でどんどん進めていき、全国に先駆けていろいろな情報を発信していた。そのシンボルとして花フェスタ記念公園ができた。そして、その県の花産業、花文化を支える若い人材を育成するために、可児の地に国際園芸アカデミーを開設したという、崇高な構想を持っていたのだが、最近花の振興への県による支援も落ちてきてきている。ある人が、文化はインフラだと言っている。ここを忘れると、観光などいろいろなものが後退してくる。奈良や京都が世界中から観光客が来るのは、古い文化や伝統というインフラを大切にしてきたからだという。そういう意味からすると、花振興を早くから取り組んできた岐阜にとっては、岐阜独特の花文化があると思う。林業、園芸、農業文化をもう一度整理して、外に発信できるような方法を3校で連携して考えていくというのも一つの方法かと思う。

○H委員

・農業高校というのは、この3つの学校に非常にお世話になっており、特に農業大学校のほうでは、自営者の養成はもちろんだが、まったく就農希望ではなかった子が、農業大学校に入って、本当に農業が好きで独立して、頑張っている。この子たちが岐阜県の農業を支えるために頑張っていることに感謝している。園芸アカデミーに入った子でも、花農家になった子もいるし、デザインの勉強をして、学校にデザインを教えに来てくれる子もいる。森林文化アカデミーもたくさんの学生が行っていて、公務員や森林組合などに入っていて、今教え子に会うと、本当に成長を感じる。そういう意味では、3つの学校が今やっている教育は非常に素晴らしいですし、自信を持って進んでいって、新しい人材を作っていくてくれたらと思う。

・先ほど農業高校の話があったが、先日JAの協力を得て、プロジェクト発表会をやった。大学の卒業論文の発表のようなものだが、高校性もそういったことに取り組んでいて、問題解決や地域連携に取り組む機会がある。そういったことを中学生などにアピールすることに力を入れており、県下の農林関係高校の7校は充足している状況。

・外国人のこともあったが、県立高校全て、一般入試とは別に外国籍の特別枠を設けて入試をやっている。だから、外国籍の方がたくさん入っている学校もある。早い時期に日本に来ている子などは、一般入試で受験する子もいる。以前、加茂高校の定時制にいたことがあるが、あの地域は外国籍の方が多いので、定時制は半数以上が外国籍の方だった。その子たちが一生懸命学校で勉強することで、日本語が話せるようになるから、外国人が多く働く土木工事現場などで、通訳として活躍していた。これから、農林水産業もたくさんの外国人の方がたくさん来ると思うので、ワンランク上の方を育てるような教育が必要なのではないかと思う。中津川の中京学院大学も半数近くが外国籍。そういった大学も結構あるので、そういう人たちが地域で活躍している。

・国際NPO法人のオイスカというものがあって、そこの豊田中部日本研修センターにフィリピンやインドネシアなどから研修に来るのですが、そこに来ている外国人に日本の農業を教えて、その人たちは国に帰って行って自国の農業を発展させるために頑張っているのだが、そういったところとの連携していくことも大事なのかと思う。

・生徒もそういったところで研修したり、海外に行って研修したりすると、見違えるほど成長するので、そういったことも検討していただけたらと思う。

○座長

・非常に貴重な県立高校についてのご説明をしていただきました。

○B委員

・人づくりというものには2つあって、JAとして農業の面を話すと、就農という人づくりもあるし、法人の場合番頭さんとう立場の人づくりもあるという話であったが、個々の農家に対する人づくりという支援があって、先ほど農業大学校の方でも話があったが、出口の方でのJAとの連携について、それは大変ありがたい。教育の中で、社会的なカリキュラムを入れていただいているが、当然就農経験もない職員が我々

のJAにも入ってくるが、仕事が営農支援となると本当に素人。だから、技術的なことと、経営的なことがカリキュラムに入ってくると非常に需要があると思う。個別農家を指導していくとなると、その指導側の人材育成もしていただかなくてはならないのかと思う。

○L委員

- ・入ってくる生徒が夢を描きながら社会に出ていっていただける、そういったところが必要だと思うので、その在り方について、農業や園芸や林業に特化してしまうと、その範疇から新しいアイデアがなかなか出てこないと思うので、夢を描くには制限を設ける必要がないと思う。そういうことであつたら、異業種との連携や新しいアイデアを持った違った分野とのぶつかり合いがあつたら良いのかと思う。例えば、車がこれだけ進化しているが、車の部品の1/3が自然に帰れるような形にするなどといった夢でもいいので、そういったことを考えていけたらいいなと思う。

- ・出口ということであつたら、働き口がなかったらダメ。それから安定収入のモデルがなかったらダメだと思う。親としてもなかなか背中を押せないと思う。であるなら、そういう事例をしっかりと作り上げていくという姿勢が学校の中にもあつたほうが良いのではないかと思う。例えば、経営とか経済とかのカリキュラムがあり、会社を経営するにはどうしたらいいのか、会社を興すにはどのようにしたらいいのかなどが身に付き、出口として働き場がしっかり用意してある。あるいは、用意をするような仕掛けがあるというのが重要かと思う。

- ・何人かの意見にもありましたが、骨太方針が出たので、今後は実装ということになると思うが、実走はやはり目標があつて、振り返りがあつて、次の手を考えるという繰り返しになるのだろうと思う。だから、これがこの5年間にどのように落ちてくるのかというのは、チェックをうまくやっていく必要があるのかと思う。

○農政部長

- ・委員の皆様方には長時間にわたり貴重なご意見を賜りありがとうございました。本日いろいろなご意見をいただきましたので、このご意見を整理して、このプランの中に落とし込んでまいりたいと思います。それから、この連携のコンセプトや3校の役割や特徴など、根本論の話は当然あるかと思いますが、我々このプランの中で来年度に向けての予算要求をしている状況にあります。3月には決定いたしますが、様々な連携の取り組みについて、出来るところから実行に移してまいりたいと思っております。今回こういった機会をいただきましたので、この連携の中で様々なコンセプトなどを作り上げていくことになるのかと思う。このプランの中で、背景と趣旨という部分は見直しをしたいと思いますけれども、委員の皆様の100%満足のいくものにはならないかもしれませんが、この5年間の連携を通じて、そういった形を作っていきたいと思っております。

とりあえず、この検討会については、今年度は今回をもってひとまず最後にしたいと

思っております。先ほど、委員の皆様の各校の視察という話もありましたので、来年度の在り方については、検討してまいりたいと思います。

3回にわたり、非常に貴重なご意見を賜り誠にありがとうございました。